

<エッセイ : 小特集「世界各地の『研究所』  
たな日本研究へ」>日文研の中庭で想うこと

新

著者	井上 章一
雑誌名	日文研
巻	52
ページ	55-60
発行年	2014-03-31
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00004091">http://doi.org/10.15055/00004091</a>

究「国際協力」という題目だけでは独自性を示すことが難しくなりつつあるように見える。その面での先駆者としての地位は重宝すべきだとしても、それに加えて研究の質や広がりを変える何らかの自己変革も必要となってくるかもしれない。

(国際日本文化研究センター准教授)

## 日文研の中庭で想うこと

井上章一

まだ、若いころ、二〇歳台なかばから三〇すぎまで、私は京大の人文研につとめていた。日本部の助手というかっこうで、七年間給与をもらっている。一九八〇年から八七年までのあいだである。

ふるさとの悪口もどうかと思うが、オフィスの見てくれはひどかった。打ちっぱなしのコンクリートで、全体はあらっぽくしあげられている。なのに、古風なアーチをあしらひ、建物は愛想をふりまいていた。現代的な無骨さをあらわしたのか、それとも過去へのロマンにひたりたいのか。なにをしめしたいのが、わからない。筋のとおらないデザインの建物であった。導線のあるばいも、ぐあいがいいとは、とうてい言いきれない。平面計画もおそまつな、まとまりのない建物であったと思う。

先日、ここをひさしぶりでおとずれた。中は入っていないのでわからないが、外観はこぎれいに生まれかわっている。いろいろな化粧をほどこし、ちょっと見られる建物に化けていた。

といっても、人文研がこれをしてなおしたわけではない。研究所じたいは、工学部の旧土木学科校舎へ、移転をさせられている。今、かつての人文研があった建物にはいつているのは、IPS細胞の研究機関である。ここを美しくみがきあげたのも、IPSの研究をになう人々にほかならない。

今をときめくIPSには、それだけの力がある。かつての人文研にはなかった力が、そなわっている。そのことを、私は思い知らされた。ノーベル賞には勝てないなど、感じいったしだいである。

東一条にあるあの建物を、私は書きはじめから、くそみそにけなしてきた。今、あれを見て、けっこうこぎれいだと感じそうな人のために、くりかえす。見ばえがよくなったのは、ごく最近である。もとは、もっとひどかったんだ、と。

書いていてつらいのだが、設計者は京大建築学科の大先輩、棚橋諒である。設計をたのまれたのは一九七二年だから、もう京大の教授職はしりぞいていた。退職後の設計である。完成したのは一九七五年。その五年後に、私はここへかよいだしたことになる。そして、入所早々のころは、こんなふうを感じたりもしていた。

構造力学が専門の棚橋先生では、うまくまとめきれなかったのかな、と。

じっさいには、北隣りの日仏会館から、壁面を南へうつすようねじこまれてもいたらしい。京都市から、想定外の高さ制限をつきつけられるという事情もあった。それで、はじめのくろみどおりには、ことがはこばなかったのだという。

それなら、設計を一からやりなおす手も、あつたらう。だが、工事をいそいだ京大側に、その時間的なゆとりはない。けっきょく、いくらか手なおしをした設計で、おしきった。いびつな導線の主たる要因は、そこにある。柵橋だけに問題があつたわけではない。

それにしても、と思う。壁面の後退と低層化を余儀なくされたわりに、この建物は中庭をひろくとっていた。このこだわりは、どういうことなのか。『人文科学研究所五十年』には、こ  
うある。

「設計者は、自分は若いときに北白川の旧東方学院京都研究所、現東洋文献センターの建物の制作に関係したが、そのときのイメージが今回の設計の基礎になっていてと告白された」。

旧東方文化学院の建物に、自分の設計はひきずられているという。

東方文化学院は、外務省の研究所で、一九三〇年に施設は竣工した。武田五一と東畑謙三の設計で、全体はまとめられている。京都を舞台とした近代建築ガイドの本などでは、しばしば紹介されることがある。建築好きには、すっかりおなじみの建物である。まあ、私の書いた『京都洋館ウォッチング』（二〇一一年）は、言及をさけているが。

これの工事に、どうやら若いころの柵橋も、かかわっていたらしい。鉄筋コンクリートの構造計算などを、てつだつたのだろうか。

構成は、ロマネスクの修道院風になっている。列柱の廊下でかこまれた中庭を、全体の中心にすえた建物である。そのイメージが、一九七〇年代の柵橋からは、ぬぐえなかった。だから、一九七五年にできた人文研の施設も、そのあとをおいかけていたのだという。

一九七〇年代には、旧東方文化学院の建物も、人文研東方部の施設となっていた。東一条に日本部と西洋部の建物をこしらえる。そのさいに、東方部の意匠が手本とされたことじたい

は、じゅうぶんうなずける。

全体の規模とはつりあいのとりづらい中庭ができたことも、わからなくはない。打ちっぱなしのコンクリートとはそりのあわない連続アーチも、のみこめる。旧東方文化学院が手本になったのだとすれば、腑におちる。

ただ、ずいぶん強引にあやかっただなものだなという印象は、いなめない。北白川と東一条では、敷地の事情がちがう。しかも、東一条では、打ちっぱなしのコンクリートでしあげることが、もとめられていた。白いしっくいをぬる余裕のあった北白川とは、この点でも条件がちがっている。

にもかかわらず、東一条の人文研は、北白川の旧東方文化学院を、まねようとした。それだけ、後者の感化力は強かったのだと、言うしかない。あるいは、前者がいただいた憧憬の度合いこそを、強調するべきか。

さて、日文研である。

日文研は、京大人文研のOBたちがこしらえたのだと、よく言われる。中曽根首相(当時)を京都にまねき、その設立をたのみこむ。野村別邸でひらかれたこの会合でも、彼らがホスト役をつとめていた。桑原武夫、今西錦司、上山春平、梅棹忠夫、梅原猛の五人が、そのホスト。そして、梅原以外は、みな人文研のOBである。

日文研の制度にも、人文研のそれからひねりだされたらしいものが、けっこうある。これも、当初の制度設計を、山田慶兒と園田英弘が中心になってがけたせいだろう。やはり人文研で若いころをすごした瀧井一博さんも、この点は納得してくれると思う。

しかし、今回はその詳細にわけいらぬ。もっぱら、建築のつくりをとりあげる。

日文研の設計は、内井照蔵にゆだねられている。この依頼をひきうけ、内井はしばしば京都へ足をこぶようになった。そのおりに、発注者の梅原猛から、どんな示唆があったのかは、わからない。しかし、とにかく、内井の目もまた、旧東方文化学院京都研究所を、さがしあてている。

じっさい、日文研もまた、ロマネスクの修道院を下敷きとしながら、構成は考えられた。列柱廊が全体のなかほどにくる配置で、平面はととのえられている。旧東方文化学院とも、その点はずうじあう。

われわれの屋外パティは、もっぱらあの中庭でひらかれる。この点は、旧東方文化学院をひきついで人文研東支部でも、かわらない。

のみならず、日文研は全体的にスペイン風のテイストで、しあげられている。とりわけ、瓦の選択に私はそのことを感じる。そして、旧東方文化学院もまた、スパニッシュ・ミッション様式で、デザインされていた。

スパニッシュ・ミッションは、一九二〇年代に流行した住宅の様式である。日本では、アメリカからこれがとりいれられた。武田五一は、この様式にとびついた、その代表格と言ってもいい建築家である。

外務省から、旧東方文化学院の設計依頼が武田のところに来たのは、一九二〇年代の末。この仕事に、武田は流行のスパニッシュ・ミッションで、こたえたのである。

余談だが、『人文科学研究所五十年』には、こうある。「デザイン・ソースは、浜田耕作氏の発案になるスパニッシュ・ミッションであるという」。

美術史にもつうじていた浜田のことである。スパニッシュ・ミッションという呼称ぐらい

は、知っていただろう。だが、浜田の「発案」はありえない。このスタイルは、東方文化学院がたつずつと前から、はやっていた。記述はあらためられるべきだろう。京大総長でもあった浜田におもねる者の回想から、この一文はできたのかもしれないが。

いずれにせよ、スペイン趣味も、旧東方文化学院から日文研へ、とどいている。おおよそ六〇年の時をへて、このふたつはひびきあう。プレモダンのスペイン趣味が、ポストモダンのそれへとつたえられた。建築の業界用語をあえてつかえば、そんなふうにも言えようか。

コンクリートのうちっばなしでしあげられた東一条の人文研に、このテイストはない。旧東方文化学院にあげられた柵橋も、スペイン風をとりいれることはできなかった。それを、内井は日文研にもちこんでいる。旧東方文化学院の建築遺伝子は、東一条をこえ、桂坂により濃くつたわったようである。

日文研を設計した内井は、その後、京大の建築学科へ教授として赴任した。武田五一がひらいた学科へ、まねかれたのである。スパニッシュ・ミッシェン様式が、人事の橋わたしをしたとは思わない。だが、なんとも言えないえにしを、そこに感じる。

私は、日文研の床や柱、そして壁を見ながら、今はなき内井照蔵にしばしば語りかける。そして、そこをとおして、旧東方文化学院へも想いをはせることがある。建築が、いやおうなく、私の想いをそこへとはこんでしまうのだ。あの内藤湖南や吉川幸次郎らも、籍をおいていた研究所に。

どうやら、ノイローゼにおちいりだしているようだ。私は管理職からはなれ、しばらくそっとしていくほうがいいようである。

(国際日本文化研究センター副所長)